

法 蓮 古 墳 群

1985年3月

総社市文化振興財団

序

豊かな緑と水に恵まれた総社市は、古代吉備文化発祥の地として栄え、市内には多数の埋蔵文化財の存在が知られています。このため、文化財の保護保存については、特に慎重に対処しているところあります。

今回の発掘調査は、民間企業による工場団地造成に伴って実施されたものです。発掘調査の結果、古い群集墳や初期須恵器の研究にとっては多大の成果を得ることができました。

この調査報告書が、今後の文化財の保護保存に活用されるとともに、わずかでも考古学の研究資料として役立てば幸いります。

調査事業に際しましては、事業者である東総社金属工業協同組合をはじめ、関係各位から多大の御指導と御協力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げる次第であります。

昭和60年3月

総社市教育委員会

教育長 浅沼 力

例　　言

1. この報告書は、工場団地造成に伴い、東総社金属工業協同組合から委託をうけて、総社市教育委員会が実施した「法蓮古墳群」の発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は村上幸雄が担当し、文化係職員谷山雅彦、高田明人の助力を得て、昭和59年10月22日から11月19日と昭和60年1月10日から1月30日まで実施した。
3. 出土遺物の整理は、昭和59年11月以降発掘調査と併行しながら、社会教育課服部収蔵庫にて行い、報告書作成後は同所に保管している。
4. 本報告書の執筆、編集は、村上幸雄が行った。
5. この報告書の高度値は海拔高であり、方位は磁北である。
6. 第2図の地形図は、国土地理院発行の50,000分の1の地図（岡山北部）を複製したものであり、その他の地形図は、総社市発行のものを複製したものである。
7. この報告書に関する実測図、写真、遺物等は、服部収蔵庫で保管している。

目 次

序 文

例 言

第1章 調査の経緯	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の体制	2
第2章 地理的歴史的環境	3
第3章 調査の経過	4
第4章 法蓮古墳群	8
第1節 位置と環境	8
第2節 法蓮23号墳	8
第3節 法蓮37号墳	17
第4節 法蓮22号墳	24
第5節 法蓮38号墳	31
第5章 まとめにかえて	31

図 目 次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 三須丘陵周辺図	3
第3図 法蓮古墳群周辺古墳分布図	7
第4図 調査前と調査後の墳丘図	9
第5図 23号墳調査後の墳丘	10
第6図 墳丘断面図	11
第7図 周溝出土の遺物	12
第8図 周溝内須恵器甕の出土状況	13

第9図	主体部と出土遺物	14
第10図	石蓋上壙 1	15
第11図	石蓋土壙 2	16
第12図	石蓋土壙 3	16
第13図	箱式石棺と焼土壙	17
第14図	37号墳調査後の墳丘	17
第15図	墳丘断面図	18
第16図	墳頂部遺物出土状況	18
第17図	墳頂部出土遺物（1）	19
第18図	墳頂部出土遺物（2）	21
第19図	墳頂部出土遺物（3）	22
第20図	主体部と遺物出土状況	23
第21図	主体部出土遺物（1）	23
第22図	主体部出土遺物（2）	24
第23図	22号墳調査後の墳丘	25
第24図	墳丘断面図	25
第25図	遺物（A）出土状況	26
第26図	遺物（B）出土状況	26
第27図	遺物（C）出土状況 円筒埴輪棺	27
第28図	出土遺物（1）	28
第29図	出土遺物（2）	29
第30図	主体部と出土遺物	30
第31図	38号墳出土遺物	31

図版目次

図版1	1. 法蓮古墳群遠景	2. 法蓮古墳群近景	35
図版2	1. 調査前の23号墳（南から）	2. 表土除去後の23号墳（南から）	36
図版3	1. 表土除去後の23号墳（北から）	2. 主体部検出状況	37
図版4	1. 墳丘と周溝	2. 掘り上がりの墳丘と周溝	38
図版5	1. 主体部木棺痕跡	2. 主体部木棺痕跡断面	39
図版6	1. 主体部棺内の状況	2. 主体部木棺痕跡掘り上がり状況	40

図版 7	1. 棺内掘り上がり状況	2. 枕石と勾玉出土状況	41
図版 8	1. 須恵器甕 (12) 出土状況	2. 須恵器甕 (12) 底部	42
図版 9	1. 石蓋土壤 1 から墳丘を望む	2. 石蓋土壤 1	43
図版10	1. 石蓋土壤 2 から墳丘を望む	2. 石蓋土壤 2 掘り上がり状況	44
図版11	1. 石蓋土壤 3 から墳丘を望む	2. 石蓋土壤 3 掘り上がり状況	45
図版12	1. 箱式石棺	2. 焼土壙	46
図版13	23号墳出土遺物		47
図版14	1. 37号墳と23号墳（南から）	2. 37号墳（北から）	48
図版15	1. 墳頂部遺物出土状況（1）	2. 墳頂部遺物出土状況（2）	49
図版16	主体部木棺痕跡と掘り上がり状況		50
図版17	37号墳出土遺物		51
図版18	1. 37号墳出土遺物	2. 22号墳調査前の状況	52
図版19	掘り上がり後の22号墳（上・南から、下・北から）		53
図版20	1. 主体部と墳内土層断面	2. 遺物出土状況	54
図版21	円筒埴輪出土状況		55
図版22	1. 円筒埴輪検出状況	2. 掘り上がり状況	56
図版23	出土遺物 1		57
図版24	出土遺物 2		58

第1章 調査の経緯

1. 調査にいたる経過

総社市街地から国道180号線を東進すると、足守川の手前で岡山市境に達する。このあたりは画聖雪舟の誕生地とされる市内赤浜である。この地から三須丘陵の東部を横断南下する道路は、十数年ほど前から整備され現在は国道429号道として県北に通じる新ルートとなっている。三須丘陵には、およそ350基の古墳の存在がしられ、一大群集墳を形成しているが、その土質は良質の真砂土であり、造成には最適の土壤である。このため丘陵内の各所には、虫喰い状態のような採土地があり、今回調査を実施した法蓮23号墳も、その立地する尾根が少しづつではあるが削取されている状態であった。昭和58年3月頃になって、この地一帯を中心に一般機械器具製造を目的としたおよそ4.5haの敷地をもつ工場団地造成の計画が明らかとなった。特別地域としての吉備路風土記の丘に近接するとはいえ普通地域外であるため計画が進行し、埋蔵文化財の対応が急務となった。このため昭和58年4月に計画地一帯を踏査し、8基の古墳が所在することが判明した。それらは一基の横穴式石室墳を除き、いずれも低平な墳丘をもつ前期の古墳と推定された。この結果をもとに東総社金属工業協同組合と文化財保護に関する覚え書を締結し、保存協議を行うこととなった。しかし幸いなことにこれらの古墳の大半は計画地境

の尾根の稜線上に位置しており、協議の結果、計画地を僅かに変更することによって現状保存が可能となったが、計画地内的一部が買収できなかったことに起因する工場配置の変更から、23号墳のみは低触することとなり、発掘調査が必要となった。このため覚え書に基き、経費の全額を東総社金属工業協同組合の負担として調査を実施することとなった。

社会教育課に文化係が新設されて以来、初の民間開発に伴う調査である。

37号墳は、23号墳の調査途次において新規に発見された古墳であり、その存在はこれまでの多くの人の踏査においても現認しえなかっただ



第1図 遺跡の位置

のものである。以上の両墳が昭和59年内に調査したものである。ところが23号墳の調査終盤になって、参加企業の増加とそれに伴う工場配置造成法面の変更等が必要となり、このため37号の南に接する22号墳が新たに低触することになった。23、37号墳の調査は59年11月中旬頃に終了し、ひきつづき協議を重ねたがその現状保存は諸般の事情から困難であり、60年1月から22号墳の調査に着手した。しかし皮肉なことにこの調査においても、調査前には確認しえなかった38、39号墳が新たに発見されたが、39号墳は計画地外であるため38号墳の調査を併行して行い、昭和60年1月末に全調査を完了した。

2. 調査の体制

発掘調査は、さきに述べたごとく東総社金属工業協同組合による経費の全額負担により、総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導助言のもとに実施することとなった。昭和59年10月から11月にかけて23号墳とその過程で発見された37号墳を調査し、一部設計変更により新たに低触することになった22号墳の調査を昭和60年1月から実施した。

なお調査にあたっては、東総社金属工業協同組合には経費の負担をはじめとして各種の便宜をはかっていただき、また渡辺測量㈱には23号墳の調査前の墳丘測量の労を煩わしたほか、発掘作業については地元住民の方々の協力を得た。記して厚く謝意を表します。

調査組織

社会教育課（文化係）

課長 樋口文男

課長補佐 村上幸雄（調査担当）

主事 秋山律郎（庶務担当）

〃 谷山雅彦（調査担当）

〃 高田明人（調査担当）

作業員 角田和義、角田歎一、横田武夫、牧野悟、角田美智子、角田寿子、角田伊勢
角田サトミ、横田勝子

なお発掘調査にあたって、下記の方々から温かい御指導と教示を得たことを記し、厚くお礼申し上げます。

岡山県教育委員会 河本清、山磨康平、平井勝、中野雅美、島崎東

岡山県史編纂室 葛原克人、伊藤晃

岡山大学 近藤義郎、新納泉

岡山理科大学 鎌木義昌、亀田修一、堀川純

岡山市教育委員会 根木 修, 神谷正義, 乗岡 実

藤田憲司, 山崎純男, 島津義昭, 間壁忠彦

なおこのほかに間接的ながら出土遺物について次の方々から教示をいただいた。

小田富士夫, 武末純一, 今津恵子, 松本敏三, 永岡暉臣慎, 田中清美, 福岡純男, 都出比呂志, 石野博信ほか多くの方々

第2章 地理的歴史的環境

高梁川は中国山地に発し、吉備高原を縫って南流し瀬戸内にそそぐ県下三大河川の一つである。河口近くの市内湛井あたりで分流した旧河道は、網の目のごとく流走し各所にいくつもの微高地を形成している。総社平野の母胎をなすこれら微高地群は、縄文時代晚期からそれ以降の時代において先人に格好の活動の場を提供した。平野の北縁は吉備高原の南縁にあり、南は200m級の主峰列にとりかこまれ、その東西を高梁川と足守川に画されたこの一帯は自然条件にも恵まれた肥沃な土地で、居住地としては最適の場であり、吉備の中権地として以後歴史の主舞台に大きな役割を果している。

三須丘陵は、平野南縁の主峰列から北東へのびる半独立状の標高50~60mの低丘陵群で構成され、その規模は3.5×1kmほどである。この丘陵には、これまでのところおよそ350基の古墳の所在が確認されている（註1）。丘陵東辺の全長350mの巨墳である造山古墳、西辺の全長286mの作山古墳をはじめ、南辺の全長120mの寺山古墳、丘陵内にある全長140mの小造山古



第2図 三須丘陵周辺図

墳などの巨大墳ばかりでなく、大小さまざまの規模をもつ前期古墳がみられ、後期にいたっても備中こうもり塚（註2）や江崎古墳（註3）、縁山古墳群（註4）をはじめとする巨石墳の存在は他の地域を圧する様相をみせ、古墳時代の全期間を通じてこの三須丘陵が一大造墓地であり、周辺の平野内の微高地上に集落が形成されていたことは想像に難くなく、また以後の時代にあっても、平野北縁に所在する古代山城鬼ノ城（註5）や、平野のど真中に推定されている備中國府跡、丘陵南縁の国分二寺の存在など、かつてこの平野を拠点とし活動した人々の足跡が大きく残されている。とくに巨大墳が築造された五世紀以降の状況は、吉備勢力の拠点として畿内政権との抗争と解体にいたる過程に如実に示されているといえよう（註6）。

さて視点を法蓮古墳群の周辺に向けてみよう。法蓮地区は三須丘陵の中央からやや東寄りにあるが、尾根一つを越えればさきにみた全国第四位の巨墳造山古墳とその陪塚櫛山、千足古墳を望む岡山市加茂の地域である。この三須丘陵の東端部に近い稜線とその周辺には、北から全長40mの方墳折敷山古墳、小造山古墳、全長50m帆立貝形の夫婦塚古墳、同形墳で全長50mの錢瓶塚古墳が並ぶ。法蓮古墳群のうち、今回調査を実施した4墳の立地する小尾根周辺には、西南西200mに獸帶盤竜鏡を出土したとされる大ぐら古墳（法蓮10号墳）（註7）を除いては有力墳はみられず、いずれも径10m前後の低平な墳丘をもつ前期古墳と推定される小墳があり、調査墳もその範囲に含まれるものである。法蓮地区から丘陵内の西方をみわたしてもほぼ同じ状況である。小造山古墳をはじめとする有力墳の時期が明確でないが、五世紀代の吉備首長權が造山古墳、作山古墳、寺山古墳へ継承されていく過程にあって、その母胎となりそれらを支えた階層の姿をこうした状況にみることができようか。

第3章 調査の経過

法蓮23号墳は、工場団地造成計画とは別途に採土が行われており、その範囲は墳端から10m弱のところまで及んでいた。調査前の現況からは、雜木や下草の繁茂、周溝の埋没もあって30cm前後の高まりが僅かに確認される程度のものであった。このため誤認のおそれも考えられるので伐開を行ったが、それでも墳丘と断定するにはいささか躊躇せざるをえない状況であった。しかし墳丘とされる部分の南側に緩くやや広い傾斜面があるのでこの部分まで刈り下げていたところ、形象埴輪の破片が僅かに露出しているのが認められた。のちの37号墳の家形埴輪片である。しかしその位置は23号墳の墳端と推定される部分から5~6mも離れており、23号墳に伴う確証はないと考えられたため、墳丘らしい部分の南北方向に幅20cmほどのトレンチを掘り下げた。周溝部分はきわめて浅く幅広く不明瞭なものであったが、周溝と墳丘地山の整形状況

からみて古墳と考えられたため、東総社金属工業協同組合と協議し発掘調査を実施することになった。調査は墳丘に直交する南北と東西方向を中心に、その間を二等分し放射状の8区に設定、北から順まわりに1～8区と呼称した。トレンチで周溝部分を確認し掘り下げるとともに、周溝域外まで表土層を除去したところ1、2区境で石蓋土壙、4、7区で石蓋土壙のほか6区で箱式石棺と焼土壙を検出した。

37号墳は、当初所在が確認されなかつたが、23号墳南にやや広い緩斜面の存在することと、伐開中に埴輪片が出土したこととあわせ、この部分が計画地内であることから後に南北方向のトレンチの南側を掘りさげたが延長部の長さが不足だったせいかこの段階では古墳と断するにはいたらなかつた。しかしその後二本の東西方向のトレンチを掘り下げたところ、墳丘西側の周溝と墓壙の一端が検出されたため、急遽23号墳の調査過程の中で発掘調査を実施することとなつた。

22号墳の調査にいたる経緯は第1章で述べたとおりである。予定区画内の伐開後、23号墳と同様の方法で調査を実施した。墳丘の北西側の7、8区は一部崩落して浅い崖状となっており、その清掃から周溝らしい形跡と溝内から円筒埴輪片が一片検出された。また2、3区からは小破片となった円筒埴輪片が多数出土し、埴輪をもつ古墳であることが確認されたが、2、3区の南の尾根の東斜面に所在する38号墳については、円筒埴輪の出土状況の全容があきらかになるまでその存在は確めえなかつた。22号墳の南に位置する39号墳は、南北トレンチの南端部の延長区で周溝が検出されたが、計画予定地範囲の測定の結果、周溝部を含めて計画地外であるため周溝を埋め戻して保存している。

日誌抄

59年9月28日 雑木、下草繁茂のため古墳と断定すること困難。下刈りを行う。

10月22日 本日より調査開始。発掘用器材の搬入と墳丘の周辺部の伐開を拡張。墳頂を中心にして放射状に8区の調査区を設定。北から順まわりに1～8区と呼称する。表土除去作業。墳形は現状では円形とも方形とも判断できない。

10月23日 7、6、5区表土層除去作業。6区で板石状の石材検出。石蓋土壙。

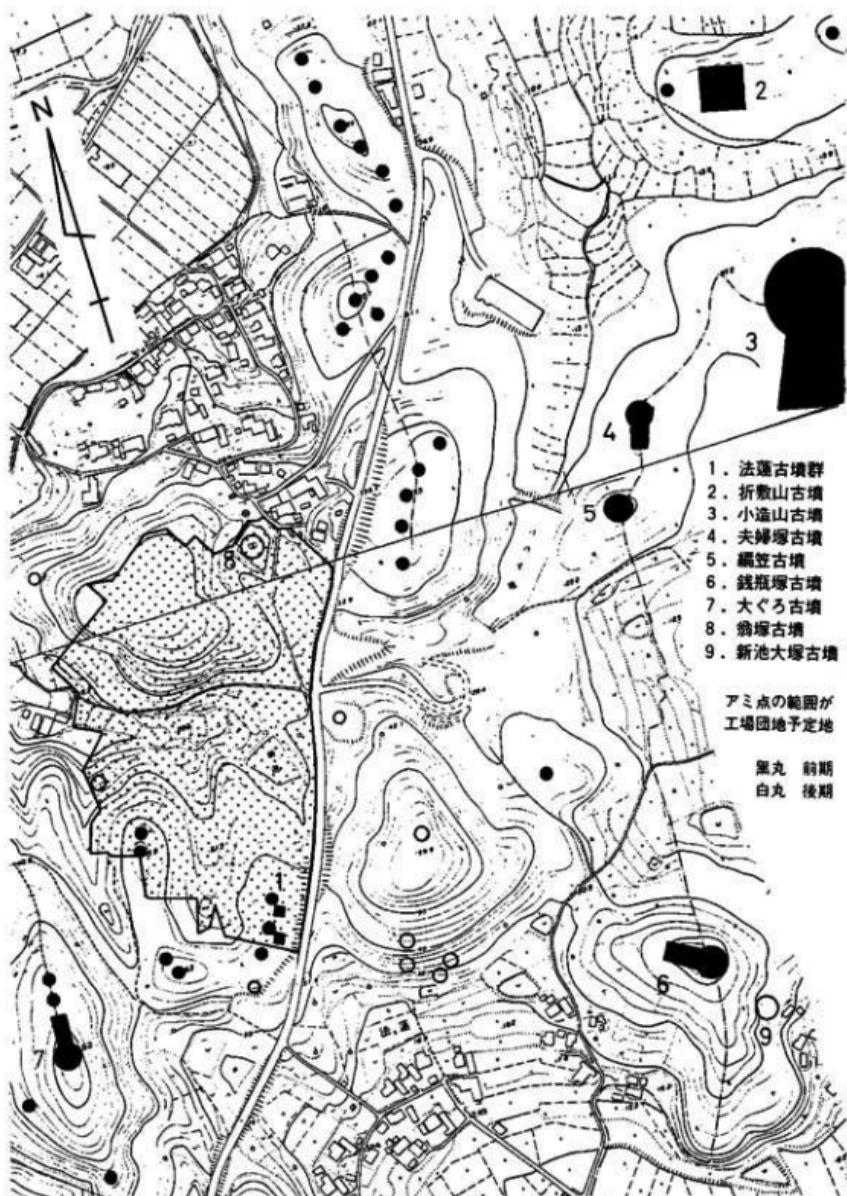
10月24日 2～5区の表土層除去作業。4区で伐開時に出土した形象埴輪片の検出作業。埴輪片はかなり多いが器形不明。小片ながら須恵器、土師器片も出土。

10月25日 1区表土除去作業。清掃後に表土除去後の全景撮影。墳端確認のためのトレンチを1、2、7区に設定し掘り下げ。

10月26日 墳端確認のためのトレンチを8区にも設定し掘り下げ。7区トレンチの墳頂部あたりで墓壙の一部検出。市文化財専門委員視察。

10月27日 3～5区にトレンチ。この結果、径10～11mの円墳と判明。7区の流出土除去中に石蓋土壙の蓋石検出。基準高を設定し、墳丘断面実測。周溝を掘り下げ開始。

- 10月29日 7区周溝内から鉄鎌出土。6区周溝外に箱式石棺検出。
- 10月30日 6区周溝外で焼土壙検出。5区周溝内から須恵器、土師器片出土。
- 10月31日 4、5区掘り下げ。埴輪の出土した部分の下層部掘り下げ。
- 11月1日 1～3区掘り下げ。1区で石蓋土壙検出。
- 11月2日 37号墳となった部分を9区とし掘り下げ。
- 11月5日 8区掘り下げ。周溝内に須恵器甕1個体分検出。
- 11月6日 全景撮影。土層観察用のあぜ取りはずし。
- 11月7～8日 内部主体検出作業。内部主体は1基と判明。
- 11月9日 5、6区石蓋土壙掘り下げ。
- 11月12日 墓輪の出土した部分の下の斜面を一部掘り括げる。埴輪、須恵器数片採集。
- 内部主体掘り下げ。組合せの木棺痕跡確認。2個の枕石を検出し、周辺で碧玉製勾玉1個出土。
- 11月13日 9区に三ヶ所のトレンチ掘り下げ。墓壙検出。法蓮37号墳とする。
- 11月14日 23号墳の墳頂部を中心に主体再確認のためトレンチ調査。新たな発見なし。
- 11月16日 37号墳の周溝及び墓壙内掘り下げ。
- 11月17日 37号墳は箱形の木棺と判明。棺内から鉄鎌、鉄斧、刀子、土師器甕各1出土。
- 11月19日 補足調査。本日で23、37号墳の調査を終了し器材撤出。
- 60年1月10日 法蓮22号墳調査開始。器材搬入。伐開。
- 1月11日 伐開、清掃の終えた部分から墳丘測量開始。墳丘西側の崖状面清掃。
- 1月12日 墳頂部を中心に放射状に8区設定。北から順まわりに1～8区とする。3、4区から表土層除去。
- 1月14日 5、6、8区表土層除去作業。
- 1月15～16日 残区の表土層除去。周溝及び墳端確認のためのトレンチを設定し掘り下げ。
- 4、5区の南トレンチ調査により周溝を確認。墳丘は殆んど流出しているが新規の古墳判明。
- 1月17～18日 2、3区掘り下げ。円筒埴輪の小片が多く出土した。
- 1月19日 内部主体検出作業。墓壙1基検出。
- 1月21～23日 内部主体掘り下げ。墳丘断面観察のためのトレンチ掘り下げ。埴輪の出土状況がコの字状を呈し、別の古墳の存在が想定される。
- 1月24日 内部主体掘り下げ。埴輪検出作業。
- 1月25日 前々日に新たな古墳を想定した部分を清掃。内部主体は検出されなかつたが古墳と考えられ、38号墳とする。コの字状に出土している埴輪のうち、一部は円筒埴輪館と推定される。
- 1月26日 22号墳の周溝の状況から、37号墳との間に新たな古墳が存在する可能性も全くないわけではないと考えられたのでトレンチ調査。遺構なし。実測等を残し、本日で作業を



第3図 法蓮古墳群周辺古墳分布図 (S = 1 /5000)

終了する。補足調査を1月30日で終り、法蓮古墳群の調査を完了。

第4章 法蓮古墳群

第1節 位置と環境

調査墳は、総社市下林1,033番地ほかに所在する。

三須丘陵は、北東端に標高70m級の庚申山をはじめとする高部があるほかは、30~50m級の短小な低丘陵で構成される。丘陵群中の中央よりやや東に標高62.6mの高部があり、ここに大ぐろ古墳（法蓮10号墳）が所在する。調査墳はこの高所から東に派生し、北へ短かくのびる標高50m弱の舌状の小尾根に立地している。ところどころに赤茶けた地肌をみせるが、10~20年生の小松や雑木が繁茂し、荒れた山容をみせており、また国道に隣接する便利さのせいか、工場団地造成計画とは別途に土採りが行われていて、すでに法蓮23号墳の墳端から10mほどのところまでが削り取られている。

工場団地造成計画地は、この小尾根と小谷を挟んだ同様の尾根の一部及び北西に聞く狭小な谷を挟んだ南向の小さな山を対象としているが、山の様相はほぼ同様の状況を呈している。

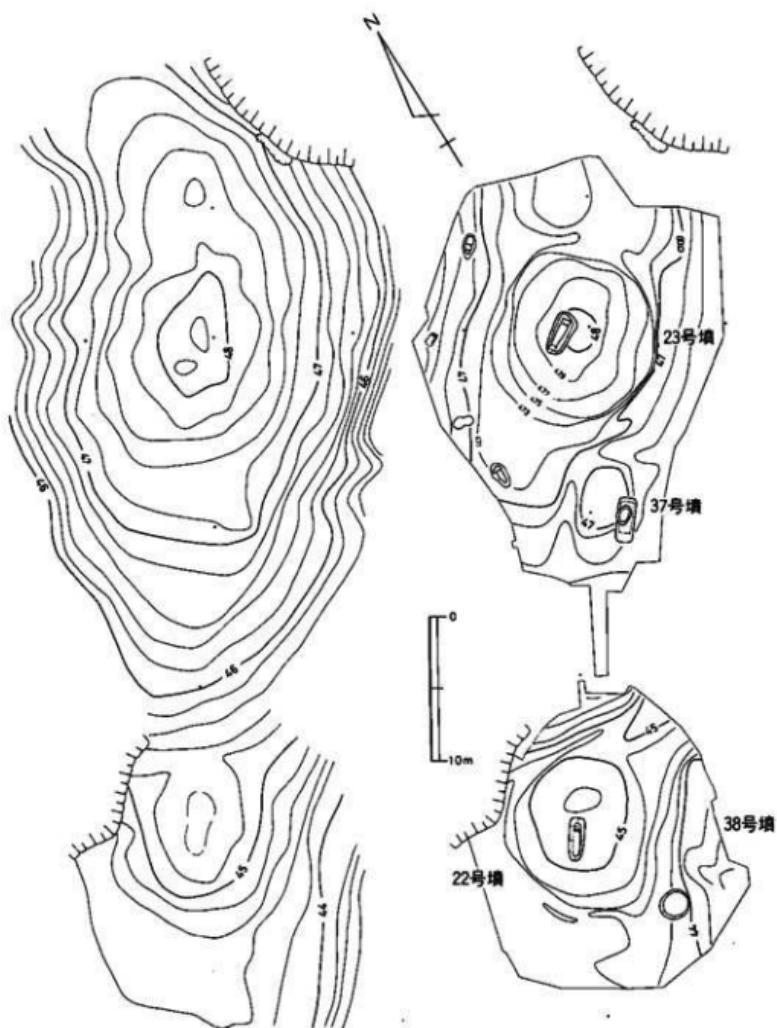
調査墳のうち、22、38号墳はこの舌状小尾根のつけ根に立地し、2~3m高くなった最高部に23号墳が、またその南や斜面により37号墳が立地するが、23号墳から北へは、谷部に向かって急激に下降する。

法蓮古墳群は、かなり広い範囲の古墳を包括しているが、計画地内およびその周辺部では横穴式石室墳は散見される程度であり、径10mほどの低平な墳丘をもつ前期と推定される群集小墳の存在が目立つ。しかし中には計画地内の一隅にあり消滅した翁塚古墳（註8）のような巨石の横穴式石室墳もあり、さきの大ぐろ古墳の存在とあわせ、古墳時代のある時期において三須丘陵内における一つの提点であった可能性をうかがわせる地域である。

第2節 法蓮23号墳

1. 墳丘

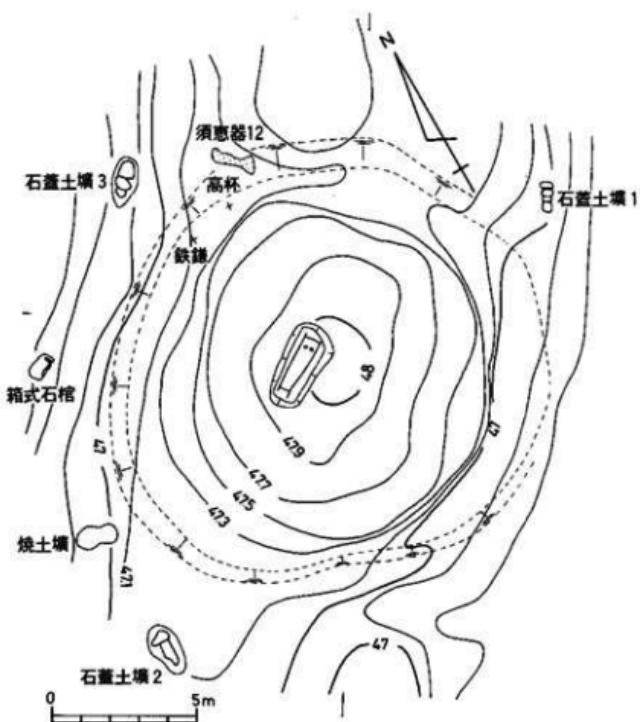
調査に先立ち、墳頂中心部と推定される部分を基点とし、墳丘を十字状に分割する状態では



第4図 調査前と調査後の埴丘図 ($S = 1/400$)

ぼ東西南北方向に四点の基準杭を設定した。発掘調査前の状況からは、円墳とも方墳ともとれる状況だったので四点間をさらに二分割し、基点から放射状となる8区を設定し北から順まわりに1～8区として全面発掘を行った。馬背状を呈すこの小尾根では、東西方向は傾斜の急な斜

面となって
いるが、図
示した部分
はその接点
ともなる部
分である。
墳丘は表
土層直下で
検出された
が、封土の
流出が著し
く、墳頂部
あたりに盜
掘壠らしい
浅い凹部と
そのまわり
が排土で少
し高くなっ
た状態がみ
られた。墳
丘の築成状



第5図 23号墳 調査後の墳丘 ($S=1/200$)

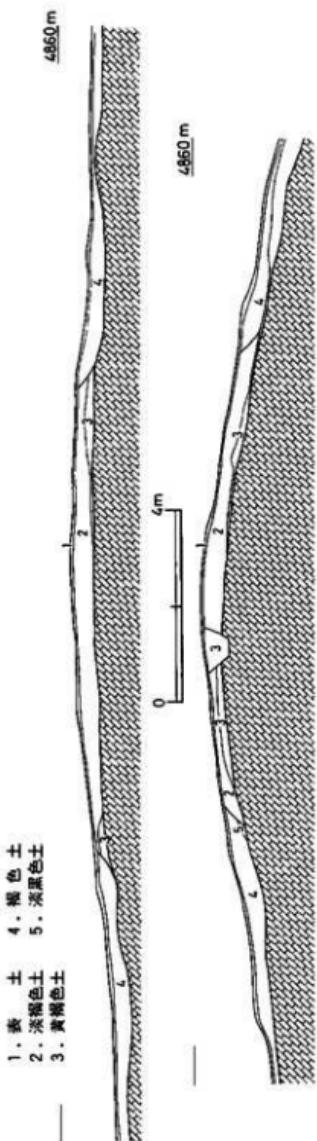
況と墳端及び周溝の確認のためトレンチ調査を行ったが、東西南北の十字方向のトレンチのみを墳頂まで掘り、その間のものは墳端と周溝の確認ができる範囲にとどめた。

墳丘は尾根の稜線上に築成されたもので、地山の風化花崗岩のばいらん土である真砂土面までを出して僅かに形を整えたのち、淡褐色土をもって盛っているが、その高さは現状で40cmを測るにすぎない。流出を考慮しても、もともと低平な墳丘であったものと考えられる。

墳形は各トレンチにおける周溝のあり方からみて円墳で、その規模は、南北10.7m、東西10.3mを測り、ほぼ11m前後の規模と考えられる。

2. 周溝

浅く幅広い周溝が、ほぼ全周を巡る状態で検出された。幅は北側では4mを測るが、東西方向は傾斜もやや急で堆積土も薄く、肩口が明確でないがおよそ2m前後であったと考えられる。



深さは地山をわずかに掘り回めた状態で南北方向の部位で30cmほどであり、底面はきわめて浅い皿状を呈している。遺物は8区で須恵器甕(12)、7区で土師器高杯(7~10)と鉄鎌(1)が出土したほか、3~6区で須恵器(1~6)と土師器(11)が出土した。

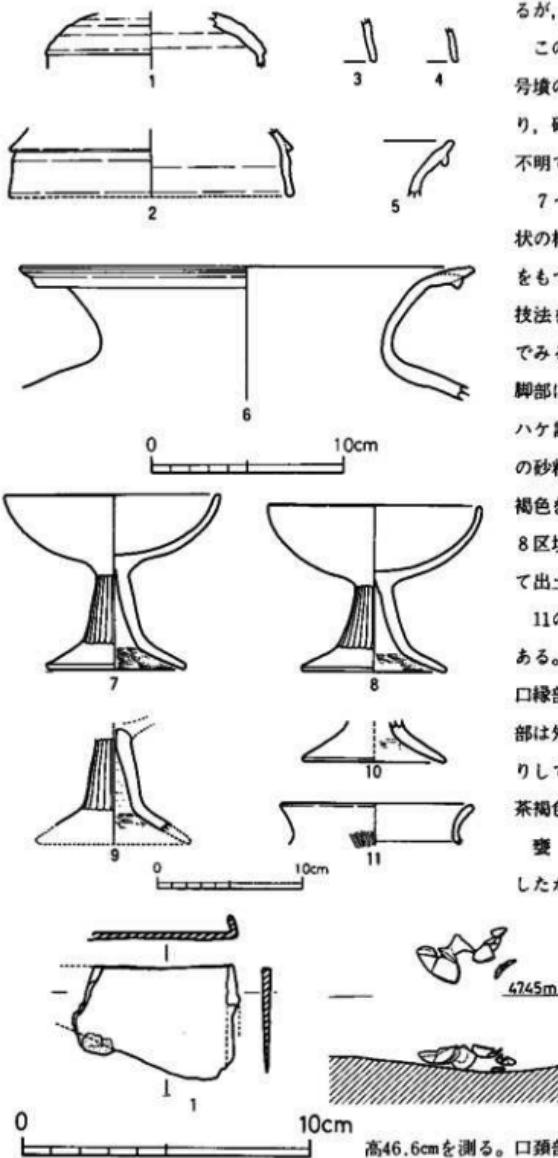
周溝内の出土遺物

1、2区の周溝内からの出土はないが、多寡を問わなければ残区では全区で出土しており、4、5、7、8区に多い。1~6、12は須恵器、7~11は土師器である。1の杯蓋は5区からの出土で、約5分の1が残存する。口縁部を欠くが、径11.5cm弱と推定される。天井部と口縁部の境に明瞭な棱を有し、天井部の全面に順方向のヘラ削りが認められる。比較的精選された胎土を用いている。焼成は堅緻で、外面は青灰色を呈している。2も杯蓋で5区からの出土だが細片である。貼付けられた綾をもち、口縁部は僅かに外反し端部は方形状におさめる。精選された胎土、堅緻な焼成で、外面は赤紫色、内面は灰青色を呈す。

3、4の杯蓋も5区出土である。2と同様な口縁部をもち、4は端面を平坦におさめる。

5、6の甕は4区出土である。6は3、5、6区からも出土しており、破片中口頸部片は4区のみにみられ、かなり広い範囲に散っている。口径11.9cm。口頸部は大きく外反して開き端部は尖り気味にまるくおさめる。一条の断面三角形の凸帯を有するが、凸帯はややまるみをもつ。1~2mm前後の砂粒をかなり含み、全体として砂っぽい胎土の印象をうける。焼成は良好で、外面は青灰色、内面は暗青灰色を、断面は青灰色に青紫色が混ざる。成形、調整とともに粗雑で凹凸を多く残し、ナデのみの調整である。5も同種のものだが細片である。胎土、色調は酷似す

第6図 墓丘断面図 ($S=1/120$)



第7図 周溝出土の遺物

るが、内面はヨコナデである。

この壺の出土した4区は、37号墳の周溝と重複する部分であり、確実に本墳に伴うか否かは不明である。

7~10は土師器の高杯で、椀状の杯部にハの字状に開く脚部をもつ。成形、調整とも同種の技法をもち、最も残存の良い7でみると脚柱部をヘラみがき、脚部はナデ、内面はヘラ削りとハケ調整である。1~3mm位の砂粒を含み、焼成は良好で明褐色を呈している。いずれも7、8区境の周溝底部からまとめて出土したものである。

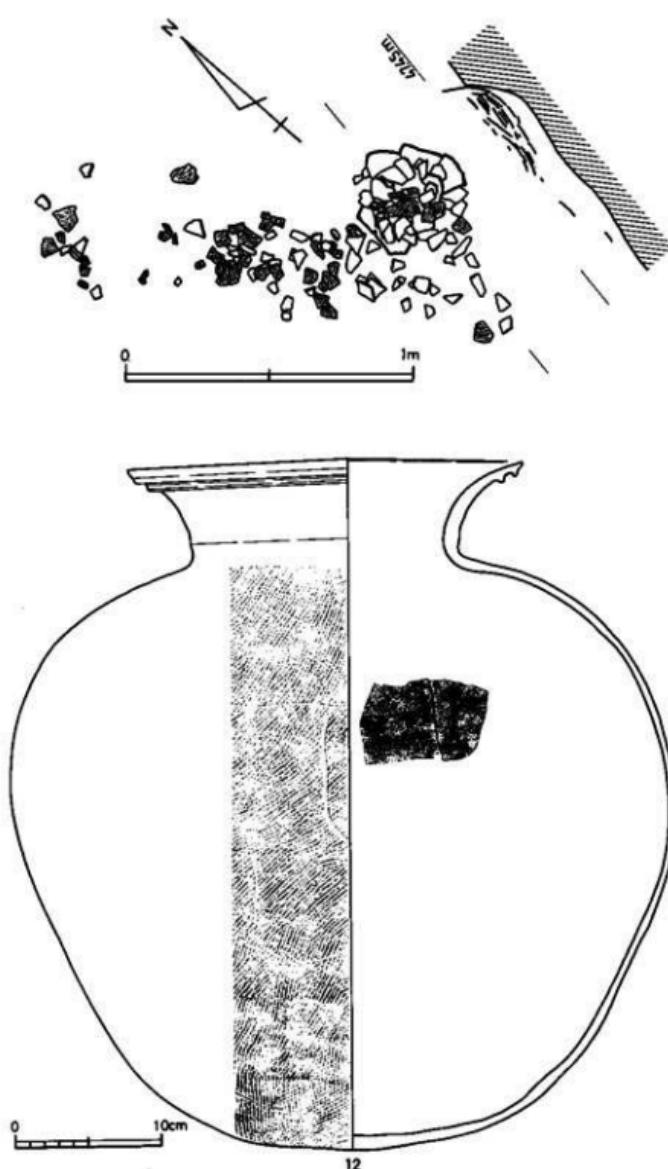
11の土師器の壺は5区出土である。外反する口縁部をもち、口縁部は内外面をヨコナデ、胴部は外面をハケ、内面はヘラ削りしている。焼成は良好で、暗茶褐色を呈す。

壺(12)は8区の周溝で出土したが、口縁部の一部は4区と5区の境のトレンチを掘り下げる際出土した。胴下半から底部は据え置かれた状態である。口縁部がわずかにいびつだが口径27.6cm、器高46.6cmを測る。口頭部は外反して開き、端部は尖り気味におさめる。これに2条の凸帯を付すが、

端面はナデられてやや平坦となっている。成形時の凹凸を多く残すが、胴部の器壁は比較的薄くつくられている。口頸部の外表面をヨコナデ。胴部は器表を平行叩き、内面は同心円文をナデ消しているが、肩部近くに一部その名残りがみられる。精選された胎土を用い、焼成は堅緻、色調は外面が暗青灰色、内面が灰青色を呈している。

鉄縛(1)

は7区の周



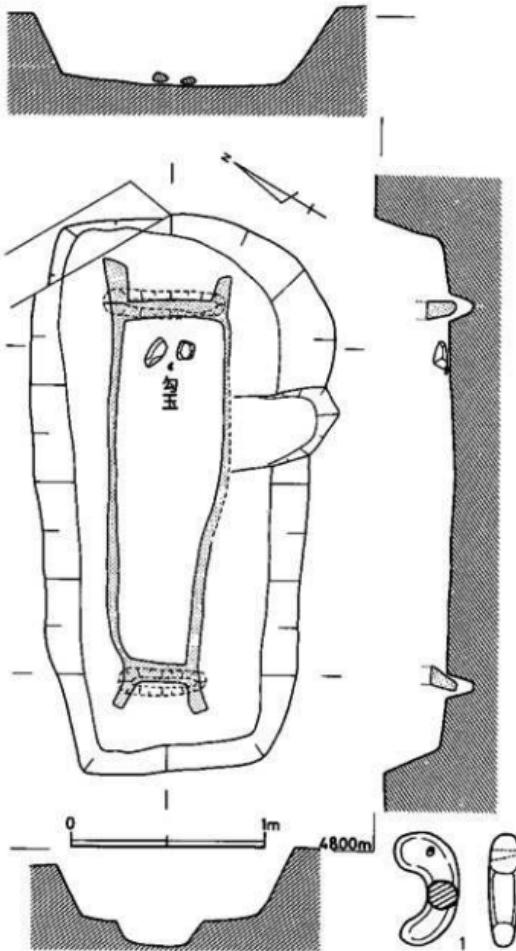
第8図 周溝内須恵器壺の出土状況

溝底より7cm程浮いた状態で出土した。先端部を欠くが、長い三角形状を呈するのであらう。

3. 埋葬施設

主体部は墳頂中央部から棺一つ分ほど西に寄ったところで、尾根稜線とほぼ平行する状態で墓壙が検出された。墓壙は6、7区境のトレンチを掘り下げた際、その一端を検出することができたが、墳頂部からやや西寄りであったため、もう一基存在するのではないかとの想定のもとに、検出された墓壙の東部分を中心に精査したが、新たな発見にはいたらなかった。

墓壙の規模は、長軸2.9m、短軸1~1.3mのやや隅丸の長方形状で、床面は地山面を掘り込んでいる。一部盜掘されていたが、比較的良好に残存しており、棺痕跡が淡黄灰色粘土としてとらえられた。棺構造は、小口板を埋め込むため床面を幅14cm、深さ13cmほど掘りくぼめてこれに小口板をたて、それを長側板ではさみ込み、一端を他端よりやや広くした組合せ式木棺である。棺痕跡から、棺の規模は内法長188cm、幅54~30cm

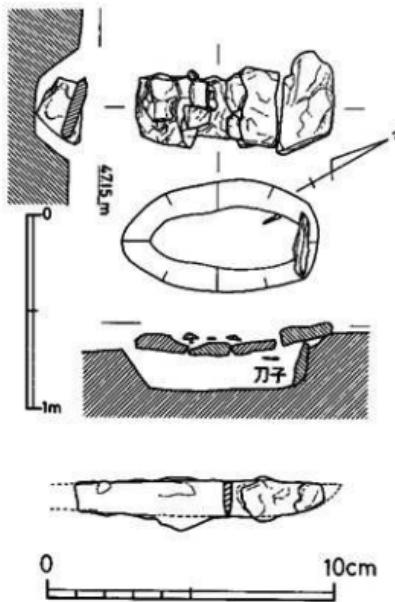


第9図 主体部 (S=1/30) と出土遺物 (1/2)

で棺材の厚みは9cm前後と考えられる。棺内は、小口が他方より広い北側に二個の枕石を並べ、その直下で全長3.9cm、厚み1.05cmの碧玉製勾玉が出土したが、他に遺物はない。

周溝外の埋葬施設

本墳では、周溝外で三基の石蓋土壙と一基の箱式石棺が検出された。



第10図 石蓋土壙1 (S=1/30) と出土遺物
が、塚底は堆積土とならない軟質土でやや明確さを欠く。塚内には二個の手掌大の石材があるが、枕石か否かは判らない。蓋石は花崗岩の板状の割石二枚を用いている。

石蓋土壙3

7区で検出されたもので、長径167cm、短径85cmの橢円形状の土壙を15cmほど掘り、さらにその塚底の中央部から長さ102cm、幅38cmで垂直状に25cmほど掘って二段掘りをしている。塚底は凹凸があり、掌大の石が南北に二個づつ浮いた状態でみられる。これに三枚の花崗岩の割石を架して蓋石としている。出土遺物はない。

箱式石棺

6区で検出されたもので、長径88cm、短径56cm、深さ16cmの墓壙を掘り、これに小形の花

石蓋土壙1

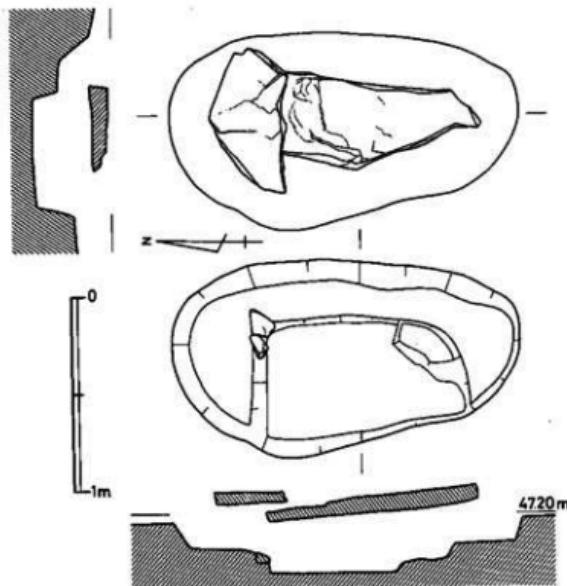
1、2区境で検出されたもので、長径103cm、短径58cm、深さ30cmの橢円形状の墓壙を掘り、北側の小口部にのみ板石をたて、これに4枚の蓋石を架し、その空隙を小さい板石で塞いだものである。石材の材質は不明だが、他の石蓋土壙が花崗岩を用いているのに比べると、全く異質の石材である。

塚内から刀子が出土したが、蓋石直下に近いレベルで遊離したものである。刀子は茎を欠消しており、刃部のみ残存するもので、残存長8.7cm、幅1.2cmを測る。

石蓋土壙2

5区で検出されたもので、長径181cm、短径93cm、深さ28cmの土壙を掘る。塚内は15cmほど掘ったのち、さらに西寄りに中央部を13cmほど掘って二段としている

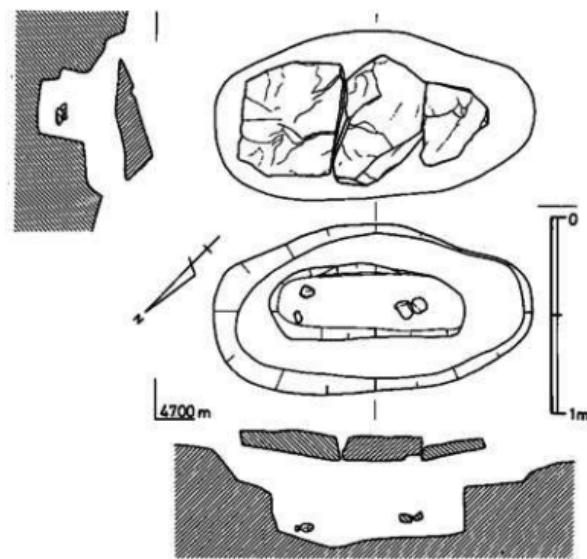
が、枕石か否かは判らない。蓋石は花崗岩の板状の割石二枚を用いている。



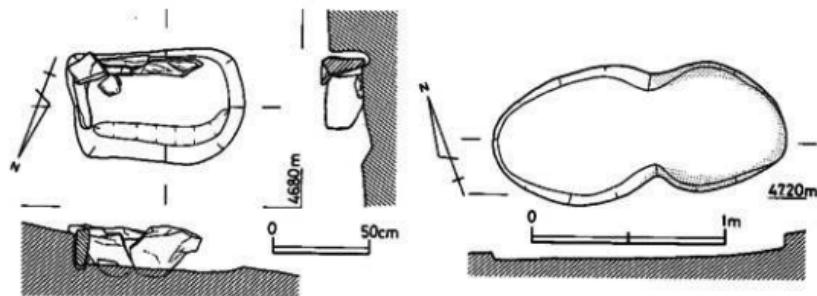
第11図 石蓋土壙 2 (S = 1/30)

崗岩を用いて箱式石棺としている。長短側の一端と蓋石を欠失している。出土遺物はない。以上の3基の石蓋土壙と1基の箱式石棺は、いずれも周溝外に位置し、本墳をとり囲むような配置状況にある。いずれも成人の埋葬は考えられない小形という点でも共通している。出土遺物が石蓋土壙1の刀子1本のみであり、速断はできないとしても、諸種の状況から本墳に付随したものと考えるべきであろう。

なおこのほかに6区で瓢形の浅い土壙が検出された。東半分は赤く焼けている。出土遺物はないが、九州にも同種例(註9)があるというから、これも本墳に付随するものであろう。



第12図 石蓋土壙 3 (S = 1/30)



第13図 箱式石棺と焼土壙 (S=1/30)

第3節 法蓮37号墳

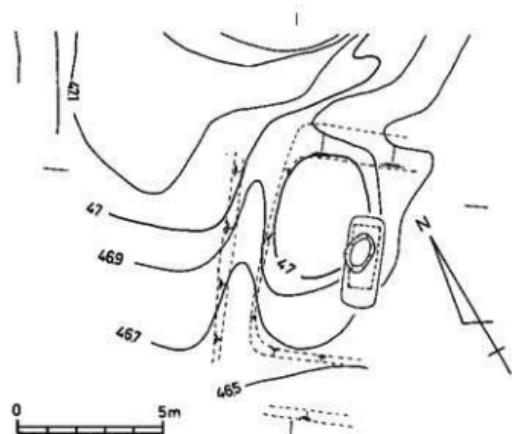
1. 墳丘

本墳は、23号墳の調査過程で発見された新規の古墳である。下刈りの際埴輪片の一部が露出しているのが確認されたが、23号墳の周溝外の地点であり、しかも本墳の存在を裏付けるような墳丘らしい高まりも認められなかったため、それらを23号墳の古墳祭祀に伴うものと判断した。このため本墳については、23号墳と同様の調査方法を探りえなかった。

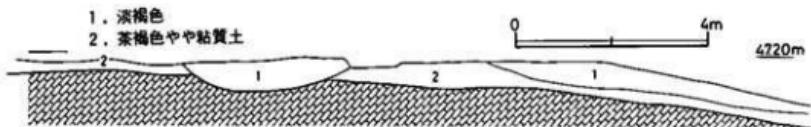
本墳が古墳と判断できたのは、東西方向の二本のトレンチ調査の結果、西辺の周溝と墓塚の一部を確認してからである。

このため墳丘築成状況を観察する位置が多少墳端近くになったが、状況は墳中央部と同じである。

本墳は、尾根の稜線上から僅かに東に寄っており、東半分は傾斜のためであろうが殆んど流出している状況である。残存する西半分の墳丘のうち、南西端が直角状を呈すること、二本の東西方向のトレンチにおける周溝が直線状につなが



第14図 37号墳 調査後の墳丘



第15図 墓丘断面図 ($S = 1/120$)

ことなどや墓丘の北西端は23号墓の周溝発掘の際一部掘り拡がりすぎたため明確でないが、北辺の周溝も直線的に東にのびている状況などからみて方墳であったと判断される。規模は東半分の流出のため、西側墓丘から判断するほかなく、一辺8mほどとなる。墓丘の構成は、残存する土層の観察からすれば盛土を行ったと考えられない土層なので、周溝を掘り、墓頂部を整形し僅かに盛った程度のものと考えられ、東辺が西辺に比べかなり高い墓丘であったろうが、すでに盛土部分は流出したのであろう。

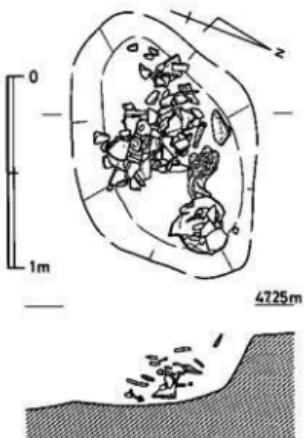
墓頂部のはば中央には、長径146cm、短径100cmの楕円形状の残存深さ30cmの土壤状の凹部があり、壇内から須恵器、土師器のほか家形埴輪が出土した。この土壤状凹部は、埋葬主体の直上にあたる位置であり、かつて墓頂部に供獻されていたであろう遺物が、棺内の埋没により凹部状を呈したのであろう。

墓丘出土の遺物

1~6は、墓頂部の凹状部からの出土である。かつて墓頂部に供獻されていたものが、のちに木棺の腐朽に伴い埋没したものと推定される。

1は須恵器の有蓋高杯の蓋と考えられる。約1/6が残存し、口径13.7cm、現高4.7cmを測るが、つまみの欠落したらしい痕跡が残る。椀状の天井部を有し、口縁端部はまるくおさめる。口縁部と天井部の境にナデられてまるみをもつ一条の凸帯を付す。天井部の下半と口縁部の内外をヨコナデ、他はナデで仕上げる。1~2mm前後の砂粒の含有は多くないが、全体としては砂っぽい胎土の印象をうける。焼成は良好で、内外面は青灰色を呈すが、断面にはサンドウィッチ状に赤茶色を呈している。成形、調整ともやや雑である。成形、第16図 墓頂部遺物出土状況 ($S=1/30$) 調整、胎土、色調などが23号墓周溝出土の甕6に酷似する。本品は陶質土器を模倣した国产のものと考えられるが、胎土の様相が九州や畿内にみられないものであり、これまでの各地での出土のものとの比較からみると、岡山で窯址の存在をうかがわせるものと考えられる(註10)。

2は器種不明だが、須恵器の脚部である。残存する内外面をヨコナデしている。胎土、色調





第17図 墳頂部出土遺物 (1)

や全体的な印象は、1の高杯蓋や23号
墳の甕6に酷似している。

3は須恵器の高杯である。口縁部が
多少いびつだが、口径22cm、脚径14.5
cm、器高14.2~14.5cmである。口縁
部は大きく外方にひらき、端部は尖り

ぎみにおさめる。脚はゆ
るやかにひらき、裾部に
低い段をもち、端部は面
をなしておわる。杯部は
ヨコナデしているが成形
時の凹凸を多く残してお
り、最下部はヘラ削りを
施している。内面もヨコ
ナデを行っているが、大
きく平らな底部には何か
を塗ったらしく青紫色を
呈している。1~2mmの大
砂粒をかなり含み、全
体的にざらついた印象を
うけるのは、先の1、2
のものと同様である。焼
成は良好で、外面は青灰

色、内面は暗青灰色を呈すが、高杯蓋にみられたような赤紫色は断面にはみられず、暗青灰色をなす。還元炎焼成という点を除けば、土師器の高杯を想起させるものである。

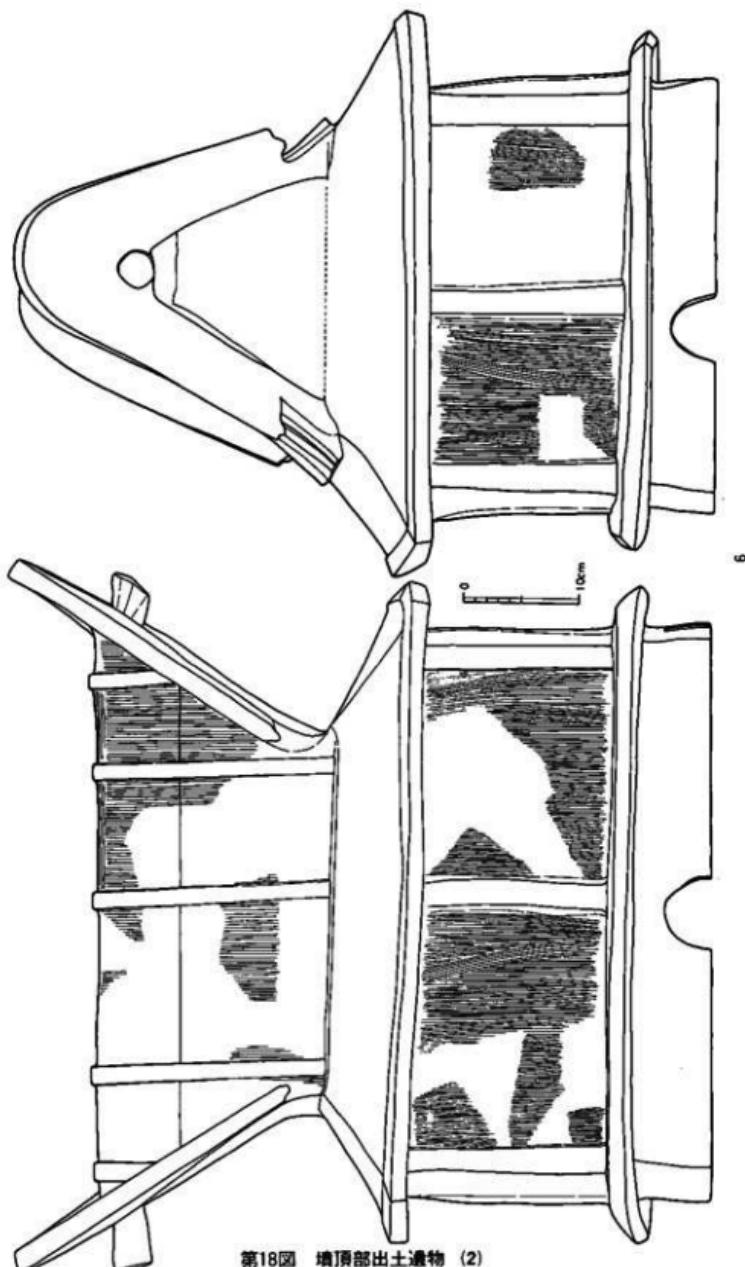
4は土師器の焼成をもつ壺である。約 $\frac{1}{2}$ が残存する。口径20cm、器高27.2cm、胴最大幅28.3cmを測る。球形の胴部から外反する頸部をもち、わずかに屈曲して口縁部とする。端部は鈍い面をなす。外面の口頸部はヨコナデ調整し、2条の浅く鈍い凹線をもつ。胴部は横位のナデである。内面も口頸部をヨコナデ、胴上半は横位のナデ、下半はナデているが、成形時の凹凸を多く残し、指頭圧痕がよく残る。焼成は良く淡褐色を呈すが、胎土中には砂粒を殆んど含まない。須恵器の壺を想起させるもので、須恵器の生焼けの可能性（註11）もある。

5は土師器の高杯脚部である。太い脚柱部はゆるやかに開いて裾部にいたる。外面と内面の下半をヨコナデ、上半をナデる。円孔が4孔穿たれている。1mm前後の砂粒を少量含み、焼成は良好で淡褐色を呈す。

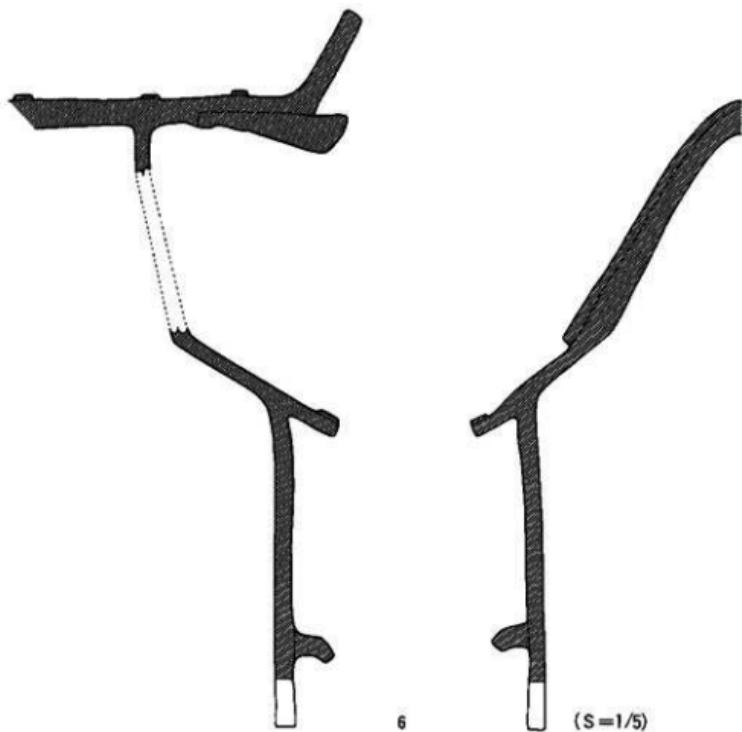
6は入母屋造の家形埴輪である。総量のおよそ40%ほどが残存しており、その接合関係から全体の規模及びある程度の構造をうかがうことができるものである。

出土した破片は一方の平側の軸部と屋根部がよく残り、妻側の一方が半分ほど残存する。2×2間の構成で、平側長46cm、妻側長36cm、棟高54cm、破風板の間の長さ61cmを測る。

妻、平側とともに基部下端に一つの弧状切り取りがあるが、平側はほぼ中央にあるのに対し、妻側はやや一方に偏っている。基部下端から6~7cm上位に断面鉤状をなす裾廻凸帯がめぐる。柱は0.5~0.7cmの厚さで貼合せて表現するが、中間の柱は平側は弧状切り取り上にあるが、妻側では切り取りが基部の中央にならぬれたものとなっている。壁は屋根部のそれより細い縦位のハケが施されているが、残存する破片中には入口や窓を表現したものはみられない。屋根部のうち、四注屋根は緩やかな傾斜を示し、軒先を4~5cmほど出している。四注部の調整はナデ調整で、軒先は厚さ3mm前後の貼合せを行って一段高く表現している。隅棟は多少まるみをもち、ヘラで印した割付線が残り、剥落したらしい痕跡があるので、何らかの飾りがつけられていたのであろう。しかし残存する破片中にそれらしいものは確認できなかった。この四注屋根の上部には、大きい切妻屋根がのる。丸棟で縦に5つの押縁がまわるが、その間隔は不揃いである。大棟から $\frac{1}{2}$ ほど降ったところにはヘラで横方向に沈線が施されているが、網代を簡略化した表現であろうか。調整は壁部よりやや粗いハケ調整が施される。妻側には大きな破風板が取付けられているが、その下端部は中央部がやや低く突出し、何かにはめ込むような表現が行われている。あるいは四注屋根の隅棟の飾りと関係するのであろうか。棟木は径3cm位の円形のもので表わされている。破風は屋根裏に欠損した痕跡が残るから、四注屋根と接続する状態のものが付されていた可能性がある。黄褐色を呈し、焼成は良好である。県下における家形埴輪としては、金蔵山古墳、月の輪古墳、四ツ塚13号墳に次ぐ良好な資料（註12）といえよう。



第18図 墓頂部出土遺物 (2)



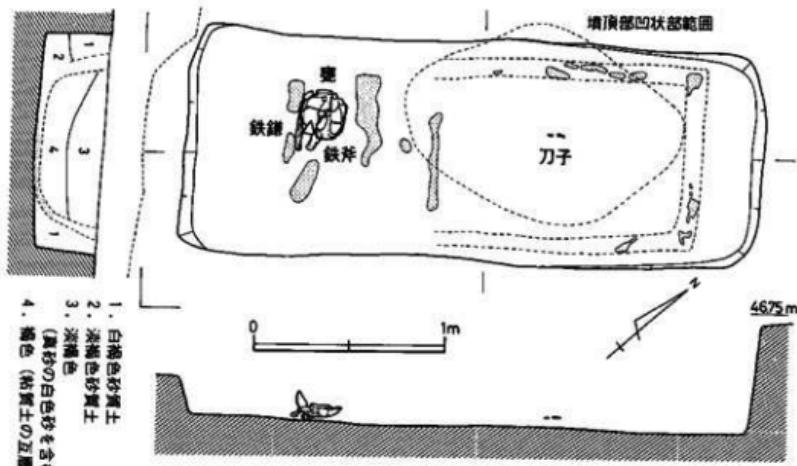
第19図 墓頂部出土遺物 (3)

2. 周溝

周溝は、北、西、南の三辺にみられるが、残存状況の良いのは西辺である。幅は検出面が150 cm前後、底部で90 cm位で、地山面を少し掘りくぼめた状態となっている。南辺は地形の傾斜のためあまり明瞭でなく、北辺も溝底部が確認されただけである。

3. 墓葬主体

本墳が一辺8 mの方墳とすれば、主体部はほぼ中央部に位置していることになる。尾根稜線に平行する状態で長辺303 cm、短辺115 cmの長方形の墓壙を55 cmほど掘っている。墓壙内には粘土化した木棺の痕跡がみられたが、南半分は棺規模をとらえられるほど残存しない。北半



第20図 主体部と遺物出土状況 ($S=1/30$)

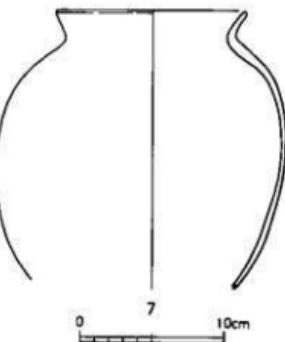
分の痕跡から推定すると、短辺部は墓壇との間に25cmほどの空隙を見いだせない状態で据えられていたようである。棺は箱形の木棺で、棺材は9cmほどの厚みをもっていたらしく、内法幅80cmを測る。長さは南側が不明だが、壇内から土師器壺、鉄鎌、鉄斧が一かたまりとして、またこれらとは1mほど北寄りで刀子が出土した。刀子を除く遺物が棺外とすれば内法長は170cm弱となり、成人的埋葬も不可能ではないが、棺幅に対する長さからすると多少短かいようであり、また遺物の南にも粘土痕跡が認められることを考慮すれば、これらの遺物は棺内副葬と考えておきたい。その場合内法長は200cm強となる。

遺物

7は口径13.4cmの土師器の壺である。やや長い胴部に外反する口縁部をもつ。内外面とも磨耗剥落が著しく調整不明である。

1は鉄鎌である。先端部が鉤状をなす直刀鎌で、全長23cm、幅2.5cm、厚さ5mmである。柄部の折りかえし状況からみて、柄は直角状にとりつけられたものであろう。

2は鉄斧である。長さ11cm、刃幅4.5cmを測る。刃部近くの断面でみると、片方の中央がやや高くなっている、他方は平である。手斧と考えておきたい。



第21図 主体部出土遺物 (1)



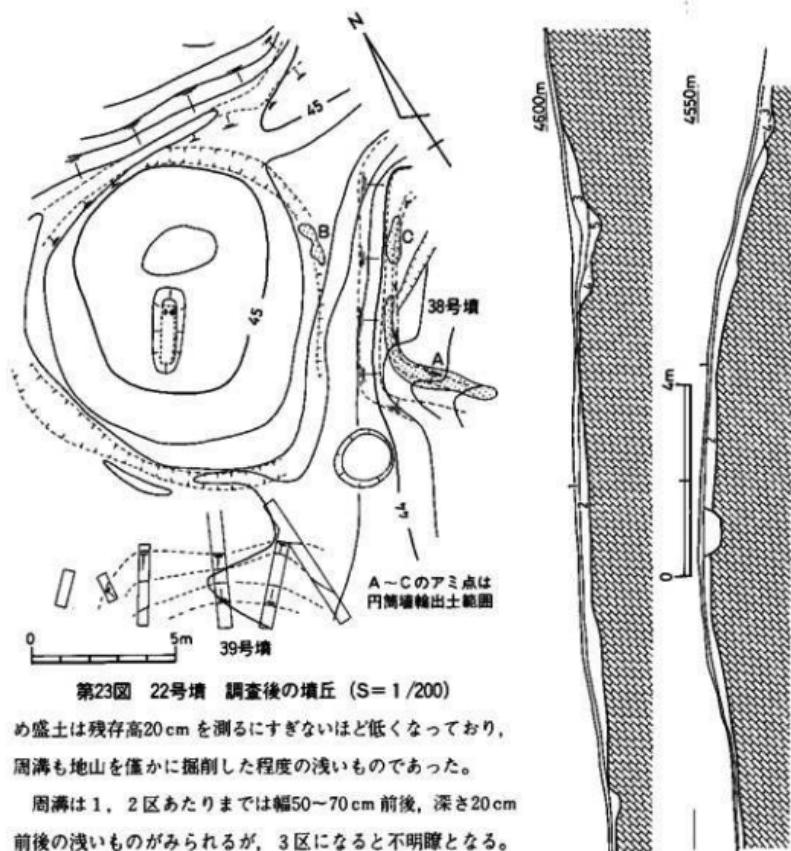
第22図 主体部出土遺物 (2)

第4節 法蓮22号墳

1. 墓丘と周溝

本墳は、舌状小尾根のつけ根部の稜線上に位置するが、尾根が23号墳の位置するあたりで最も高くなるので、同墳よりは3mほど低い位置に所在している。墳丘の西北側は谷の奥部になり、土砂の崩落で小さな崖状となっていた。調査は23号墳と同じ方法を用い、墳頂部を中心にして放射状に8区画を設定し、北から順まわりに1~8区とした。

墳丘は尾根のつけ根の平坦部に位置するが、1区以北は徐々に高まりを増している。墳丘の調査に先立って崖状面の清掃を行ったところ、周溝と考えられる溝を検出し、溝内から円筒埴輪小破片が出土した。各区に墳端と周溝確認のための珪を残し表土層を除去したが、流出のた

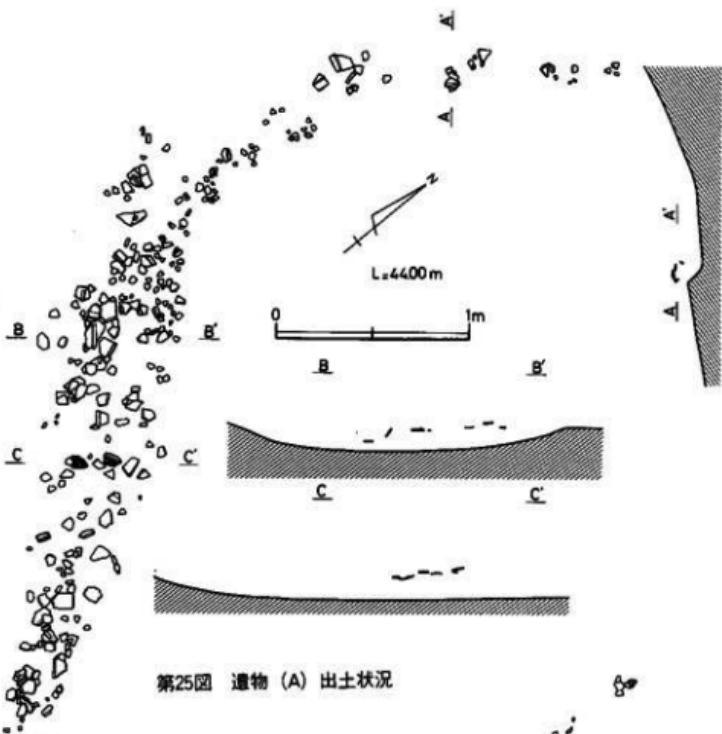


第23図 22号墳 調査後の墳丘 ($S=1/200$)

め盛土は残存高20cmを測るにすぎないほど低くなってしまっており、周溝も地山を僅かに掘削した程度の浅いものであった。

周溝は1、2区あたりまでは幅50~70cm前後、深さ20cm前後の浅いものがみられるが、3区になると不明瞭となる。4~6区間も同様の浅い溝がみられるが、3、4区境のあたりでは不鮮明となっている。地山の傾斜により周溝の一部が崩れたのか、38号墳の築造に何らかの因があったのかは判らないが、いずれかの理由により変形したのであろうと思われる。7、8区では不明である。当初7区の巣状部で検出した溝を本墳の周溝と考えていたが、のちに掘り下げたところこの溝は7区から北東へカーブするような状態がみられ、しかも1、2区の周溝外の地山が全く掘削されていないので少くとも本墳の周溝と考えることはできないであろう。あるいは 第24図 墳丘断面図($S=1/120$)

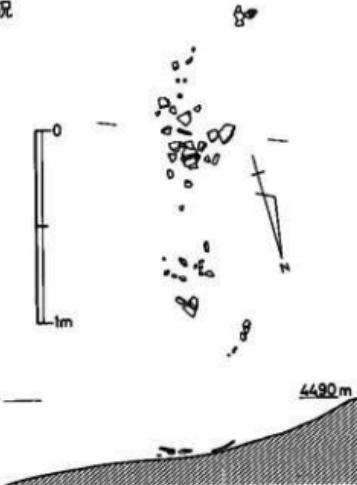
1. 黄土
2. 淡灰褐色砂質土
3. 黄灰色砂質土
4. 灰褐色砂質土
5. 淡青黄色砂質土



第25図 遺物（A）出土状況

本墳の北側、つまり37号墳との間に別の古墳があり、その古墳の周溝かもしれないと考え、のちにトレンチ調査を行ったが当該地を古墳とする要素は何ら認められなかった。この性格不明の溝と本墳の周溝との先後関係は明瞭でないが、円筒埴輪片が溝内から出土したことなどから、周溝より後に掘削された可能性の方がつよいようである。従って本来は幅70~90cm前後の浅い周溝があつていただろうが、流出や削平をうけて変形したものと考えられる。

円筒埴輪は、2区の周溝の一部と3区の境外



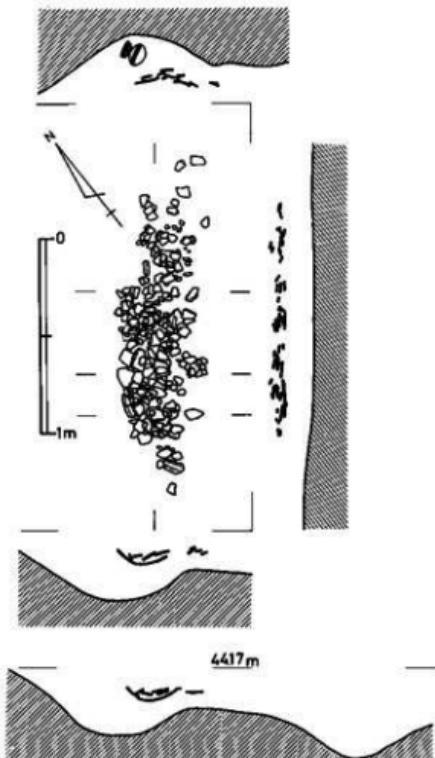
第26図 遺物（B）出土状況

から38号墳の周溝内にかたまるような状況で出土した。大部分は小さな破片となっており、混在する状態で須恵器の壺片などが散見された。また、38号墳の西辺の周溝の北隅のあたりで、二本の円筒埴輪を組合わせた埴輪棺が検出された。これらの円筒埴輪は22号墳の墳丘上にたてられていたものであろうが、比較的早い時期にこわれ、流出し、その一部が周溝内や境外、あるいは38号墳の凹部となっていた上にとどまつたのであろう。出土した埴輪は棺に用いられていた2本を除けば、すくなくとも4本はあるようである。この他に朝顔形になると思われるものもある。いずれも口縁部と胴上半部らしく、基底部となるものは出土片中には見当らない。おそらく比較的遅くまで墳丘内に残存していたであろう基底部を含む胴下半はのちに流出し、斜面を転落していったのであろう。また埴輪の出土位置をみると、2、3区周辺に集中しており、他の区では崖状部で1片出土したのみであることを考えると、かつて樹立していたであろう位置は、2、3区を中心とした主体部の東側の墳丘であったと考えられる。この位置は、東南に開ける集落が存在していたであろう位置から最もよく望見されるところである。

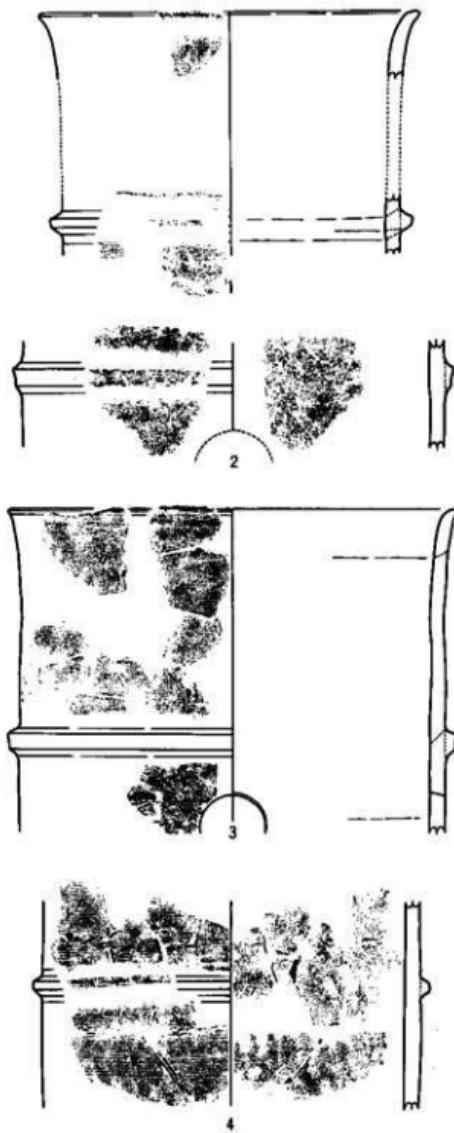
本墳は、こうした状況から、径10mほどの円墳で数本の円筒埴輪をもっていたと考えられる。

円筒埴輪棺

38号墳の周溝の西辺側に位置する。土層の状況から38号墳の周溝がほぼ埋まってから置かれたものである。いずれも小さく破損しているが、北側に赤褐色に焼きあがったもの(1)を、南側に黄褐色に焼きあがったもの(2)を合わせて用いている。1の破片は、この周溝の西辺にみられる他の埴輪の中にも多少混在しているが、2のものは殆んどみられないことや、他の埴輪の破片がこの部分に存しないことなどから、この二つの埴輪が棺として用いられたものとみてよかろう。調査後水洗した二本の埴輪を点検したが、1は基



第27図 遺物(C)出土状況・円筒埴輪棺(S=1/30)



第28図 出土遺物 (1) (S=1/5)

2は軟質、脆弱で殆んど復元できない。口縁端部は破片中に存しない。タガは高さ0.5~0.8cm

底部を、2は口縁部と基底部の破片を確認することができなかつたことは、いさきか気がかりである。時期的には、1の破片が他の埴輪と同レベルで混在していることから、本墳とほぼ同期であり、付隨したものと考えておきたい。

なお4区の境外にみられる径200cm、深さ40cmの円形土壙は、出土遺物はないが壇内堆積土からみて後世のものと考えられる。

出土遺物

1、2ともに小片に破損しており、接合が困難なため径の算出がやや不安定である。

1は出土埴輪中小片になつてゐるもののが最も多いため、接合は殆んどできず、タガのまわりと口縁部をわずかにうかがうにすぎない。口縁部は端部がわずかにひらき、ややまるみをもつておわる。タガは断面が台形状を呈し、高さ1cm位で上面をハケでナデている。残存する内面の調整はナデによるものであるが、外面には二次調整に細い横ハケが認められる。しかしその種類については小片のため明確でないが、簾状を呈すものが一片存する。孔は円孔である。1mm前後の砂粒を少量含み、焼成は良好で赤褐色を呈している。



第29図 出土遺物 (2)

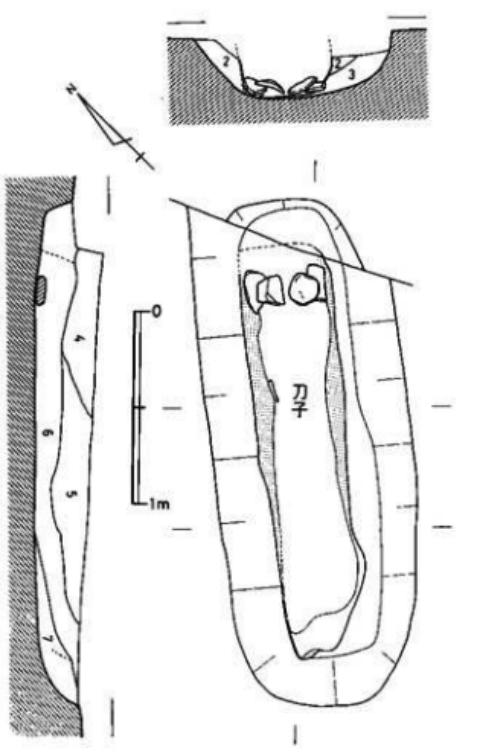
部で、端部はわずかに開いて端面をつくる。タガは断面台形状のもので、高さ1cmで太くがっしりした感じである。外面は出土個体中でも最も細い横ハケでB種である。内面はナデ消されているが、横ハケが残存する部分もある。孔は径5.6cm前後の円孔である。微砂を少量含み、焼成は良好でやや硬く淡褐色を呈している。

4は破片の少い個体であり、復元部を除いては小片が少量ある。タガ高は0.8cmで、やや細く高い感じのするものである。外面には出土個体中最も粗く太いC種の横ハケが施され、内面にも斜位と横位の粗いハケがみられる。孔は不明である。焼成は良くやや硬い焼上がりで、淡褐色を呈している。

5はタガが最も細く高い印象をうける個体である。タガの断面形は長方形状で、高さ1.2cmである。他の個体に比し胴径も少し小さく、器壁もまた薄い。外面には1と同様の細い横ハケが施されており、C種と思われる。内面にも斜位の細いハケが認められる。1mm前後の砂粒を少量含み、焼成は良好で黄褐色を呈している。この個体も破片が少なく、図示した部分のほかは少量であり、口縁部や孔はない。

で、断面はおしつぶされた台形状の幅広くやや低いものが付されている。タガの上面はヨコナデにより凹部を呈す。外面のハケは中細の横位、内面は中細のものとやや粗いものの二種がみられる。横ハケの種類は大きな破片に復元できるものがないのではっきりしないが、C種(註13)と考えられる。黄褐色を呈し、やや軟質である。

3は最もよく復元できたもので、残存する破片は口縁部とその直下ぐらいいの部位のものである。多少いびつなため、胴径がもう少し小さくなるかもしれない。ほぼ垂直状にたちあがる口縁



1. 茶褐色砂質土
2. 暗茶褐色砂質土
3. 淡白黄色砂質土
4. 淡茶白色砂質土
5. 暗茶褐色砂質土
6. 茶褐色砂質土

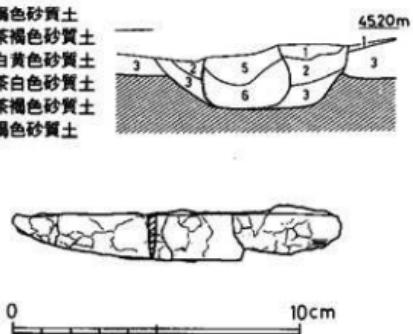
6は朝顔形埴輪と思われるが、小片のため径は不明である。外面には粗い縦位のハケが残る。焼成は良く褐色を呈している。

以上のはかもう1~2個体存するらしいが、小片であつたり磨耗のため明確でない。

7は円筒埴輪片と混在して出土した須恵器である。口径17.3cm、胴最大幅20.8cmを測る。大きく外反してひらく口頸部をもち、口縁端面には一条の沈線が施される。頸部の中位に鈍い棱がめぐり、その上下には横描波状文がめぐる。現存する胴部はやや扁平で、胴最大幅のあたりに横描平行沈線を、その上部には一条の沈線をめぐらせ、その間に波状文をめぐらす。成形、調整とともに丁寧で精造された胎土を用い焼成は堅緻で、淡青灰色を呈する。断面は赤紫色である。口頸部の形状から壺であろう。

2. 埋葬主体

主体部は表土層直下で検出された。墳丘中心部にほぼ位置するが、北側に他の棺が存在してもおかしくないような空間をもつようと考えられたので精査したが、検出されなかった。



第30図 主体部 ($S=1/30$) と出土遺物

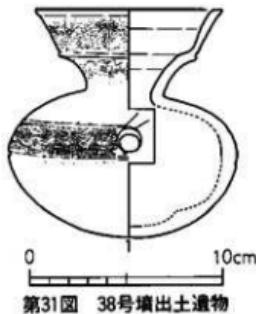
墓壙は、長辺263cm、短辺104cmで角に丸味をもつ長方形形状を呈し、深さは30cm強である。この墓壙内に北を少し空けた状態で木棺を納置していたらしく、その痕跡が確認された。土圧の影響もあるので速断はできないが、断面図にみると棺痕跡に丸味がみられることから、割竹状の木棺を考えておきたい。棺の規模は、長さ215cm、幅47cmほどで、棺内の北側に平石状の枕石がみられる。この枕石の下側には安定をはかるためであろうさらに一箇ずつの石が据えられている。遺物は枕石から40cmほど南側で、刃長8cmほどの刀子が出土したのみである。

第5節 法蓮38号墳

22号墳の東の斜面に所在するもので、同墳の調査過程にその存在が判明したものである。斜面に位置するため墳丘は殆んど流出しており、僅かに地山に掘削された周溝が遺存するのみである。周溝は西辺がほぼ完全に残り、南北辺も僅かに残存していたが、南辺の状況からみて傾斜につれ自然消滅するもので、かつては傾斜の高い側にあった北辺を中心コの状に存したものであろう。墳丘の規模は西辺の状況から、一辺6m位であったと推定される。西辺の周溝部から北東に幅30~50cm、深さ20cmほどの浅い溝がみられるが、本墳との先後関係は不明である。

西辺の周溝の北側の隅からおよそ1mほど南寄りの円筒埴輪棺の下の周溝底から、隨の完形品が出土した。さきにふれた円筒埴輪等は、本墳の周溝がほぼ埋った段階で流出、堆積したものである。

随は口径9.9cm、胴径11.9cm、器高9.9cmを測る完形品である。よくくびれた頸部にたまねぎ状の扁平な胸部をもち、口縁部の上面は平坦で、一条の凹線状の浅い線がめぐる。口縁部と頸部、二本の沈線で画された胴部にそれぞれ波状文がめぐる。また孔の上には二本のヘラ描き線がみられる。胴下半をヘラ削りし、のちにナデ消す。焼成はやや軟質で、暗赤紫色を呈す。



第31図 38号墳出土遺物

第5章 まとめにかえて

法蓮古墳群の発掘調査は、当初23号墳のみを対象としたものであったが、その後で37号墳が新規発見され、さらに計画の一部変更に伴って22号墳が対象となり、その過程で埋没していた38号墳が新規発見され、計4基の調査となった。このため調査日程に無理を生じ、不完全調

査となった感はまねがれない。

調査墳4基についてみると、まず立地の面で尾根上と斜面の二つに分かれ、しかも斜面側に立地するもの（以下斜面型と尾根型と呼称）が尾根上に立地するものに先行する様相をみせる。舌状小尾根という地形的制約性に起因するのであろうが、尾根稜線上がより優位な立地とすれば、のちに築造される古墳を意識していたとも考えられ興味深い。本市内の三輪山南斜面に所在する弥生時代終末期からほぼ五世紀中葉頃まで築造された殿山古墳群（註14）が、尾根稜線上の高い方から順次低い方に築造されていった過程と比較しておもしろい。

墳丘についてみると、斜面型の37、38号墳が方墳という墳形を採り、規模が一辺6～8mに対し、尾根型が円墳で径10～11mと対象的である。墳丘出土の遺物については、37号墳が墳頂部に供獻されたと考えられる家形埴輪1棟、模倣とみられる須恵器や土師器の存在があり、22号墳では円筒埴輪数本が樹立されていたようである。

埋葬主体については、すでに流出したと考えられる38号墳を除き、いずれも一基ずつで木棺直葬の形態をとる。ただ木棺の形状については、37号墳が箱形、23号墳が小口板を挟みこむ組合せ式、22号墳が割竹状の剝抜式？と推定されるなど変化にとむ。また周溝外の埋葬施設ではあるが、23号墳では主墳をとりまくように3基の石蓋土壙と1基の箱式石棺が付設される。いずれも成人の埋葬が考えられない小形であること、配置状況とともに興味をひく。

主体棺に伴う遺物は、37号墳が鉄鎌、鉄斧、刀子、土師器甕各1、23号墳が碧玉製勾玉1、22号墳が刀子1という状況である。

個々の状況が異なるのは当然のことであるが、それらを総体的に比較対象した場合は、古式群集墳として捉えられるこれら調査墳の考察にとって有効であろう。

さて調査墳の築造期と順序であるが、これについては幸いなことに各墳から須恵器が出土しているので手がかりとすることができる。37号墳からは高杯蓋、高杯がある。高杯蓋は陶質土器の模倣とみられ、半球形の天井部をもち、口縁部との間に一条の凸帯をもつ。同墳の高杯（3）や焼成現況が土師系の甕（4）も須恵器の模倣品であろう。本墳周辺の造山古墳の陪塚柳山古墳（註15）、祈寺庵寺（註16）、作山古墳の北方の丘陵内（註17）からは陶質土器が出土しており、本墳の出土須恵器にみられる胎土の様相が在地で求められそうな状況と併せ、陶邑編年（註18）でいうTK73併行期の中でとらえられよう。23号墳出土の須恵器のうち、確実に伴出とできるのは大甕（12）である。口縁端部を尖り気味におさめ、上面をヨコナデした二条の凸帯を貼付したこの甕は、TK216期と考えられる。38号墳からは、完形の甕が出土しており、ON46期に比定できようか。22号には甕があり、ON46～TK208期と併行する時期であろうか。

このように考えるならば、調査墳4基の築造順位は、37号墳、23号墳、38号墳、22号墳となり、五世紀の中葉頃からあいついで築造されたこととなる。

本古墳群の調査にあたっては、多くの方々の助言と教示を得たことを記し、謝意を表したい。低平な墳丘をもつ古墳の調査が、いかに慎重に、しかも大胆に行わなければならないかを痛感した調査であった。

註

1. 岡山県道跡台帳 第3分冊による。
2. 葛原克人「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告35』岡山県教育委員会 1979年
3. 全長45mの前方後円墳で、全長14mの横穴式石室には家形石棺をもつ。総社市史編纂事業の一環として、1984年10月～12月に岡山大学考古学研究室が調査。
4. 石室全長10m以上、玄室幅2.5m以上の巨石の横穴式石室三基を含む古墳群。村上幸雄「緑山17号墳」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告1』1984年 総社市教育委員会
5. 「鬼ノ城」鬼ノ城学術調査委員会 1980年 石室全長15.5m、玄室幅2.3m。
6. 西川宏「吉備の国」学生社 1975年
7. 西川宏「岡山県造山古墳とその周辺の前半期古墳」『古代学研究』90号 1971年 梅原末治「岡山県下の古墳発見の古鏡」『吉備考古』第85号 1952年
8. 永山卯三郎「吉備郡史」巻上 1937年
9. 山崎純男氏の教示による。
10. 第17回埋蔵文化財研究会において間接的ながら多くの方々の教示をえた。
11. 山崎純男氏の教示による。
12. 藤田憲司「岡山県」「形象埴輪の出土状況」第17回埋蔵文化財研究会資料 1985年
13. 川西宏幸「円筒埴輪論」『考古学雑誌』64-2 1978年
14. 平井勝「殿山遺跡 殿山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告47』岡山県教育委員会 1982年
15. 島崎東「備中綾山古墳群の遺物について」『岡山県史研究』第3号 岡山県史編纂室 1982年
16. 葛原克人、岡本寛久「柏寺廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告34』岡山県教育委員会 1979年
17. 岡山大学考古学研究室「三須丘陵道路分布調査報告」1976年 県内の初期須恵器を集成したものに伊藤晃、島崎東「中国地方一岡山県一」『日本陶磁の源流』柏書房 1984年 がある。
18. 田辺昭三「須恵器大成」角川書店 1981年



1. 法蓮古墳群遠景



2. 法蓮古墳群近景

図版 2



1. 調査前の23号墳（南から）



2. 表土除去後の23号墳（南から）

図版 3



1. 表土除去後の23号墳（北から）



2. 主体部検出状況

図版 4



1. 塗丘と周溝



2. 掘り上がりの塗丘と周溝



1. 主体部 木棺痕跡



2. 主体部 木棺痕跡断面

図版 6



1. 主体部棺内の状況



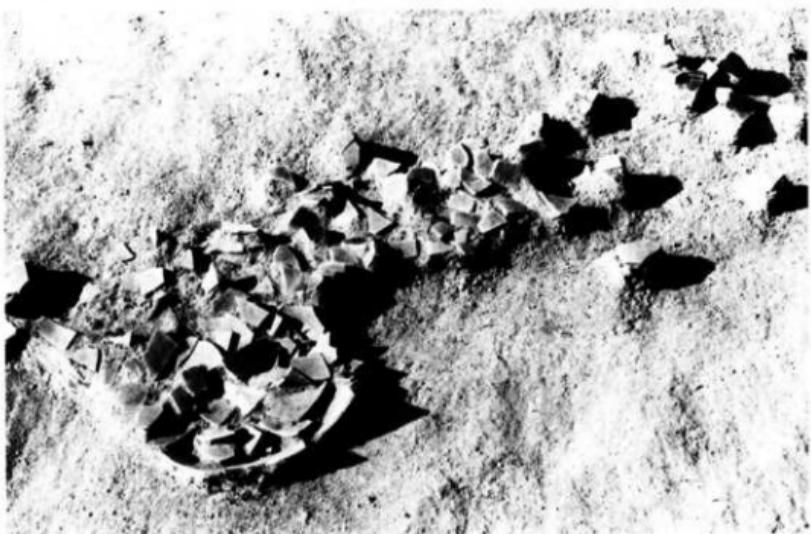
2. 主体部木棺痕跡掘り上り状況

図版 7



2. 枕石と勾玉出土状況

圖版 8



1. 須惠器壺 (12) 出土状況



2. 須惠器壺 (12) 底部



1. 石蓋土壤 1 から墳丘を望む



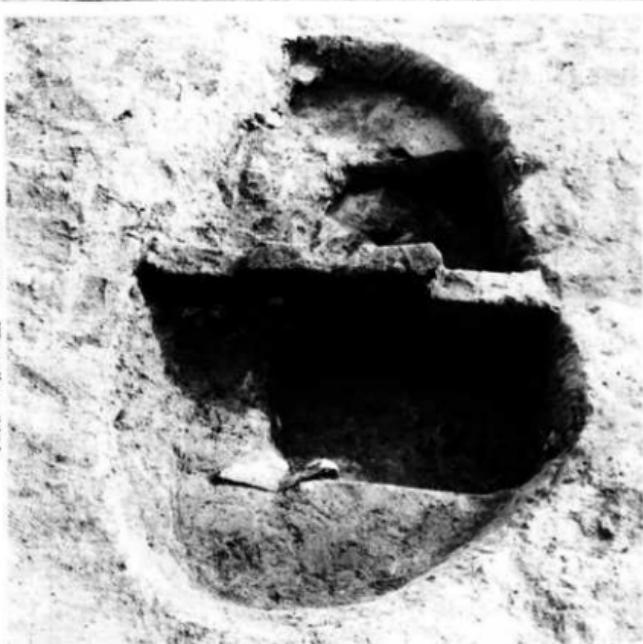
2. 石蓋土壤 1

図版10



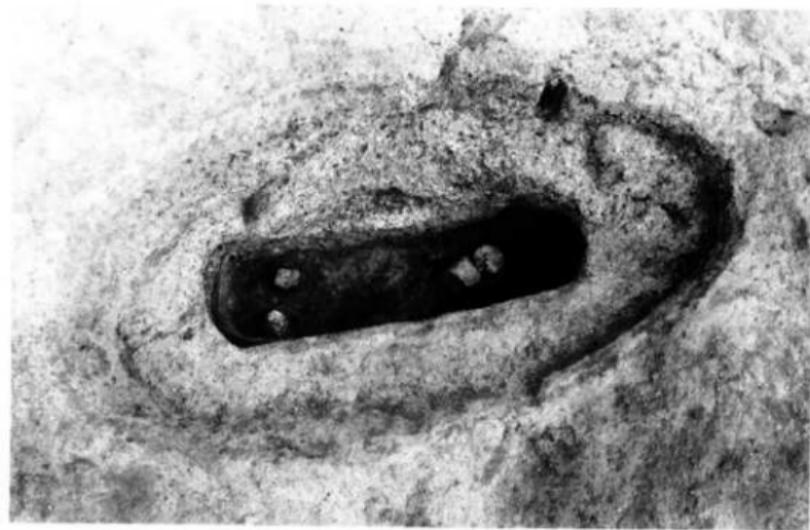
1. 石蓋土壙 2 から墳丘を望む

2. 石蓋土壙 2 挖り上り状況





1. 石蓋土壤 3 から墳丘を望む



2. 石蓋土壤 3 掘り上がり状況

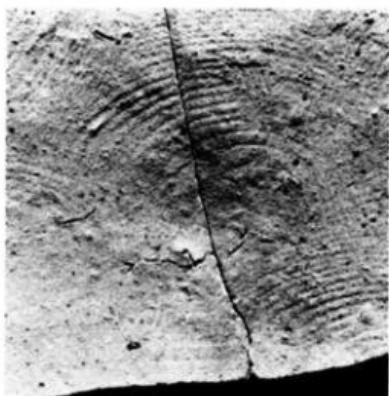
図版12



1. 箱式石棺



2. 焼土墳



12



1

石蓋土壤 1



7



8

23号墳 出土遺物

図版14



1. 37号と23号墳（南から）



2. 37号墳（北から）

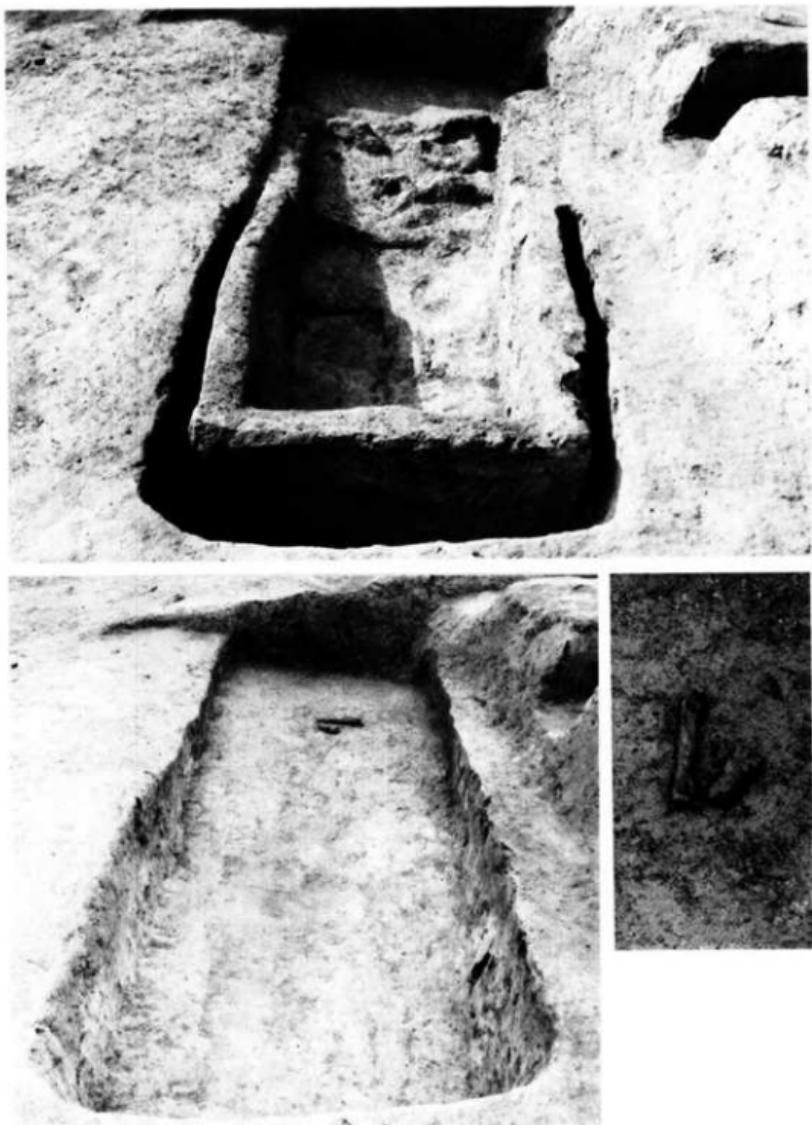


1. 填頂部遺物出土狀況 (1)



2. 填頂部遺物出土狀況 (2)

図版16



主体部 木棺痕跡と掘り上がり状況



37号墳 墳頂部出土遺物

図版18



1. 37号墳 主体部出土遺物



2. 22号墳 調査前の状況



掘り上がり後の22号墳（上・南から、下・北から）

図版20



1. 主体部と壇内土層断面



2. 遺物出土状況



円筒埴輪 出土状況

図版22



1. 円筒埴輪棺検出状況



2. 掘り上がり状況

図版23



2

1



3

4

出土遺物 1

図版24



7

5



1

出土遺物 2

総社市埋蔵文化財発掘調査報告 2

法蓮古墳群

1985年3月 印刷
1985年3月 発行

編 集 総社市教育委員会
 総社市中央1-1-1
 発 行 総社市文化振興財団
 総社市中央1-1-1

